

編集後記



東日本大震災から1年になった。想像を超えた大規模な地震と津波は多くの人々から命を奪い、また多くのものを奪って生活や人生を変えてしまった。また福島原発からの放射線被曝の問題は、拡大の危険さえ残している。

医療と災害は、起こりうる事態を的確に予測し、十分な準備をしないと大変な損害を生じるが、反対に十分な対策を行っていれば被害は小さくできる点で似ている。今回、これだけの被害を体験しながら何の記録も残さず、対策を講じなければまた同じか、それ以上の被害が生じる可能性があり、少なくとも何が悪く、何が良かったかを明らかにするべきとの考えから記録集編集のワーキング・グループが編成された。委員の中には自らの診療所が津波の被害にあったものも選ばれており、復旧と引き続き診療の中、精力的に活動してくれた。

今回行った調査は震災後の余裕のない時期に行ったため、極めて目の粗い筈で掬うようなものであった。各々の事項について確かなデータを得るならもっと詳しい調査が必要になろうが、忙しい中でもできるだけの記録を残さなければならぬと考え、調査を行った。多くの同窓会員が震災後の復旧作業、診療で忙しい中、調査の回答と沢山の意見を寄せて下さった。ここに記録されたことは、会員が実際に体験した困難に基づいた意見である。ご協力いただいた同窓会員の皆様には、この場を借りて心からお礼を申し上げたい。

震災後の活動の中で、医療が行政からも一般社会からも災害時に重要なものと考えられていない事を知った。宮城県の災害対策本部には医療班が組み込まれておらず、透析患者にはガソリンが優先的に供給されたが、診療する医療側には十分な供給が無い等、問題があったが、幸い外傷患者が少なく何とか対応できたというのが実態である。水、食料、衣類などと同等に、災害時に医療は重

要であることを知ってもらわなければならないが、これは日頃の生命や健康を守るための様々な医療活動から得られる理解と信頼が基盤となる事を肝に銘ずるべきであろう。

また、福島第一原子力発電所の損壊に始まる放射線被曝の問題では、患者および地域住民と医療従事者やその家族の避難の基準をどのように決定するか、未だに解決していない。

前述のように、この記録集の内容は粗ではあるが、ここに挙げられた一つ一つのデータから、今回の東日本大震災が東北地方の医療現場に与えた様々な影響が見えてくるはずである。この記録集が医療分野における今後の災害対策の参考になればと、心から念じている。

東北大学整形外科同窓会

東日本大震災記録集編集ワーキング・グループ

伊勢福修司

北 純 (委員長)

小池 洋一

佐野 博高 (事務局)

中條 悟

森戸 伸吾

(文責 北 純)